

▼平田院長プロフィール
 大分上野丘高校から川崎
 医科大へ進学。昭和六十
 二年に同大を卒業後、大分医
 科大（現大分大医学部）第
 二外科へ入局。国立長崎中
 央病院、大分中村病院、厚



生連鶴見病院、宇佐胃腸病
 院外科医長、織部消化器科
 副院長などを経て、平成十
 四年七月に市内田尻、サン
 ライフ植田店東側に胃腸科・
 肛門科・内科・外科診療の
 「ひらた医院」を開院。医
 学博士。日本外科学会専門
 医。日本消化器外科学会認
 定医。日本外科学会、
 日本消化器外科学会、
 日本大腸肛門病学会、
 日本消化器内視鏡学
 会、日本消化器病学
 会、日本胃癌学会に
 所属。連絡は、ひら
 た医院（電話548・
 7616）へ。

ひらた医院 院長 平田孝浩

HP <http://www.hirataiin.com/>
 E-mail: info@hirataiin.com

40代から増える大腸がんに要注意

大腸がんは早期に発見すれば治しやすいが、ガンが発生した部位によつて現れる症状は異なります。

大腸がんは早期に発見すれば治しやすいが、ガンが発生した部位によつて現れる症状は異なります。しかし、初期にはほとんど自覚症状がないため見逃してしまふことも少なくありません。そのため、大腸がんは長さが一・五〜二センチほどあります。そのため、ガンが発生した部位によつて現れる症状は異なります。【便秘と下痢を繰り返す「便通異常」】

まず検査を受けましょう

早期に発見するに発見するたためには、四十歳を過ぎたら一年に一回は「便潜血検査」を、五十歳を過ぎたら、加えて「大腸内視鏡検査」も受けると良いです。【血便・下血】

腸にがんが出来る時、便の表面がこすれて出血します。そのため、便に血液が混じる「血便」や「下血」が起こります。これは痔の症状と似ており放置されることがあるので注意が必要です。一方、盲腸や上行結腸などの肛門から離れた部位にがんが発生した場合、出血しても肉眼ではわかりづらく、自分ではほとんど気づきません。

行い切除します。

【貧血】
 がんから出血し、便の中に血液が流れると「貧血」の症状が現れます。これらの症状は、がんがある程度大きくなると現れません。早期の大腸がんには、自覚症状がほとんどないと考えられた方が良いでしょう。また、進行したがんでも貧血や便秘などに気づかないこともあります。大腸がんは早期がんの段階で治療をすればほぼ完治します。

●便通異常が起こる仕組み●

S状結腸や直腸にがんができると、次の仕組みで便通異常が引き起こされる。

●便秘



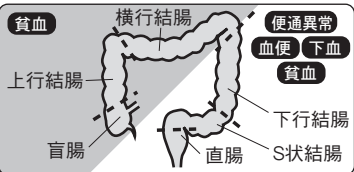
大腸にがんができると、便の通り道である腸管の中が狭くなり、便秘が起こる。おなかが張って膨満感を覚えることもある。

●下痢



がんによって狭くなった腸管から、便を何とか押し出そうとして大腸の働きが活発になり、下痢を起す。

●がんの部位による自覚症状の現れ方●



もよりますが検査時間は十〜三十分程度で、ポリープなどを切除する場合はもう少し時間がかかります。五十歳を過ぎたら毎年うけた方が良いでしょう。